

□書 評

沖中重雄・高橋忠雄・大島研三 著

内 科 診 断 学 (第7版)

東大教授 吉 利 和

本書はすでに長い歴史をもち、わが国の内科診断学の定本とされたものであり、わたくし自身も多年にわたって本書を用いて学生の講義や実習に当ったもので、いま本書の書評をするに当たっても、なつかしさが一ぱいである。

本書の初版は、序文に沖中先生が書かれているように、戦後間もないころで、外国の本の入手が困難なときに、東大で実際に診断学を教えておられた3人の先生方が自ら執筆されたものである。このことは、今日の第7版にいたるまで一貫して本書の特徴といってよい。つまり、実際

に学生を教えるものの立場からみて、経験と知識をうまくおりまぜたものであり、外国語の本のうけうりでないことなのである。このたび久しぶりに第7版を拾い読みさせていただいたが、3人の先生の人々がよくあらわれており、また平常言っておられ考えておられることが行間ににじんでいる。他の人では絶対に書けないことが多いのである。

古い版にくらべて、新しい知見が十分にとり入れられ、項目もすっかり新しくなっているし、まったく書きかえられた所も多い。とくに進歩の著しい分野では、診断学の進歩が

その学問の進歩それ自身を示しているといってもよからう。

第7版では、とくに最後に、主たる一般検査法をまとめておられる。これも使用者の側からみて非常に便利であるとともに、この部分だけとってみても、立派な独立した体系をなしているようである。

診断学とはどういう学問なのか？この議論は最近多くの新進の学者によってなされているが、そのような議論は空論に終ってはならない。具体的なものから出発する必要がある。その意味では、本書をまず理解することが、この論議の出発点であることを強調し、医学を志すものが、一度は本書を読むべきものであらうと考える次第である。

A5判 頁625 図125 写真25
原色5 ¥2,400 ㊦110

医学書院刊